



地域から

第 1 号

2021年4月発行

「地域から」編集室

〒630-0222

奈良県生駒市一分町872

TEL 090-1159-6823

FAX 0743-77-8188

編集・発行責任者 中筋 恵子

造り酒屋の煙突がそびえ、お寺の屋根が見える。まわりに農家あり、新興住宅ありの集落。冬休みした田んぼは、米を作る大仕事をひかえ、その時を待つ。

厳寒で明けた新年にはもう梅の老木がいつぱいの白い花を咲かせ、やがてあみず、桃、菜の花、さくらと春爛漫図。そして新緑の世界。どこにでもある、畑と新興住宅が混在したベッドタウンの春。

そんな村の中を毎日手押し車を押し、三十分かかって畑に通っていた九十五才のおばあさんが、ある時その姿が見られなくなった。かつての日本人の象徴のような姿だった。間もなくおばあさんの丹精込めて耕した畑はあつけなくつぶされ、宅地に変わった。こういう現実が次々当たり前のように展開されるこの地域。わが故郷。

日本各地のこぼれるほどの自然豊かな地を訪れるたび、文句なしの現地の美しさがうらやましかった。わが故郷を長らく好きになれなかった。

しかし、一番長く住んだこの地。「住む」と言う意識はなく、ねぐらの存在だったこの地。いやおうなくこの地に根を下さなければならぬと覚悟した時、見方が変わった。

緑の季節、造り酒屋の煙突は見えなくなる。蔵の前の大木が生い茂るからだ。自然が虫食いのように失われていくこの地域にも、やはり自然の営みは確実に繰り返されている。新旧混在した集落にも、人々の暮らしが続く。

地域に時代が集約される。「地域からモノを見る」「地域に立って考える」——これがいま最も必要とされる時代が始まった。

創刊号

特集 ▶ 信州・栄村コンサート

“はとなすが育ち 子どももも育つ”

日本海を目の前に臨む山形県鶴岡市堅吾沢にある小堅保育園。この地域には昔から栽培され、食べ継がれてきた在来作物「波渡なす」があります。「小堅地域ならではの里山や海の幸を活かした食育で『命の大切さ』『共に生きる』ことを学ぶ」——を目的にした同園では、子どもたちがなすのタネをおなかであたためて畑に植え、世話をし育て、みんなが収穫し、料理して味わっています。

小さなタネの物語？みんなの波渡なす

作詞 波渡なすの妖精
作曲 鈴木恵

1 ちいさなちいさな はとなすのたね
たいせつにたいせつに おなかに入れて
かわいいかわいい めげでによ
おなかポカポカ

ぼくはちいさなおかあさん
ぼくたちのおまじない
おおきくなれ おおきくなれ はあ

2 うすむらさきいろのはとなすのはな
ぽんとおちてかわいい なすさんうまれた
あついあついおなごまじいあびて
おおきな おおきな はとなすなつた
ぼくたちのおまじない
おいしくなれ おいしくなれ はあ

3 ぼくのおなかで そでてになすが
ぼくといらいしょに おおきくなつた
おひさま しおかせ

みんなのこえがお
まいにちみすやり おまじない
みんなのおをいが ギョツとつまった
やさしいおあじの
おいしいはとなす はあ

4 おかしのわかしの ばばちゃんたちが
まもってきた はとなす 二二にしかない
二二だからそだつことのできたんだ
ぼくたちも二二で

おおきくなるよ
これからまもるすつとすつと
まもりつがれていきますように
はあ

「地域から」発刊にあたって

いつの間にか七十の坂を越えたものとして、自分らしい表現をひとつ残しておくべきと考えました。昭和・平成・令和——この三つの時代に存在したものとして、あまりに早い時代の変化を、自分なりの切り取り方で記録したいと考えました。それは自分一人だけでなく、やはり同じ時代を生きた自分とつながりのある人たちとともに。好きな時に、好きなことを、好きな人たちが読んでほしい方たちへ届けます。(中筋)



この地域の在来野菜「波渡なす」